# 音読テキスト「日本の名文」11

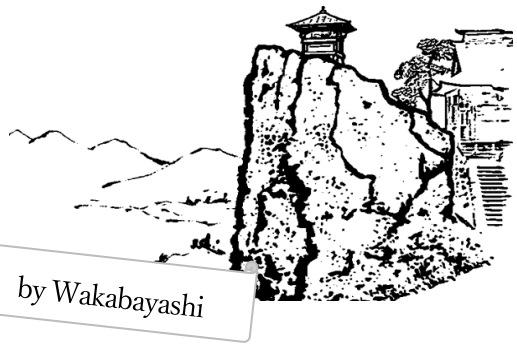
## 奥の細道②

松尾芭蕉

参考
①角川ソフィア文庫「おくのほそ道」尾形仂
②おくのほそ道評釈　角川書店
③本当はこんなに面白い「おくのほそ道」実業之日本社
④ウィキペディア

山形領に立石寺という山寺あり。慈覚大師の開基にして、ことに清閑の地なり。一見すべきよし、人々のすすむるによりて、尾花沢よりとって返し、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。ふもとの坊に宿借りおきて、山上の堂にのぼる。岩に巌を重ねて山とし、松柏年旧り、土石老いて苔なめらかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず。岸をめぐり、岩を這いて、仏閣を拝し、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蝉の声




【掲出文の大意】
山形の所領に、立石寺という山寺がある。慈覚大師の開いた寺で、閑寂な地だから、ぜひ一目ご覧になればと勧められたので、尾花沢から逆方向に戻った。その距離は、七里くらいの距離である。着いたころ、日はまだ暮れていない。山の麓に宿坊をとっておいて、山頂のお堂に登った。巨岩に巨岩を重ねるような岩山であり、年経た松やヒノキなどの木々が生い茂り、苔が石や地面を滑らかに覆い尽くしている。山上にある多くの支院の扉は閉ざされていて、物音一つしない。崖を巡り、這うようにして岩を登り、（やっとの思いで）仏閣を拝んだ。絶景の中、寂しいほどの静けさが支配し、心はどこまでも澄みわたるのを感じた。

静かさや　岩にしみいる蝉の声
（なんという静けさであろう。その静けさの中で、蝉だけが激しく鳴いている。あたかも、周りの岩々に蝉の鳴く声が吸い込まれ浸み込んでいくようだ。その限りない静寂の中に、自分の心も、周りに融けこんでいくようである）…季語（蝉…夏）

※この句以外に、「さびしさや岩に染み付く蝉の声」などが残されている。

【おくのほそ道】松尾芭蕉（江戸時代の俳人。滑稽味を中心とした俳諧を芸術の域にまで高めた）

芭蕉は、元禄二年三月二十七日、江戸を出立し、東北、北陸を経て、同年、九月六日、大垣に到着した。全行程二千四百キロ、半年に及ぶその旅を綴った作品が「おくのほそ道」である。芭蕉四十七歳。簡潔にしてリズム感に富んだ俳文、「軽み」とよばれる俳句の新境地を切り開いた発句の数々、日本文学中屈指の紀行文学である。

取り上げた文章の前半は、有名な冒頭文。人生を永遠に続く旅にたとえ、旅がまた同時に人生であるとして、自らの生涯を振り返りつつ、旅への覚悟を述べている。また、後半は山形県の立石寺での参詣の様子を描く。急峻な岩山の上に建つ寺の威容を、わずかな言葉で描き切る。蝉の声が、岩に染込んでいくというありえない状況を表現することで、蝉のさんざめく鳴き声と、そこから浮かび上がる深山幽谷の「寂しく静かで澄み切った世界」を表現する。

近年、同行の曽良の日記との突合せが細かくなされ、順番を変えたり、行っていない場所に言及したり、ありえない状況を描くなど、紀行文の体裁を持ったフィクションとしての本質が明らかになった。また、能楽との関係にも照明が当てられ、その夢幻能的な特徴が浮き彫りにされている。